

ペンテコステの日、集まった弟子たちが各国の言葉で「神の偉大な業を語っているのを聞」いて、エルサレムに集まっていたユダヤ教徒たちの一部は「何の意味だろうか」と問い、また他に「酒に酔っているのだ」と嘲った反応があった。それに対して、12使徒が立ち、代表者としてペトロが、この出来事は旧約聖書ヨエルの3章に預言されていた聖霊の「注ぎ」である、と語った。

こう語った後、続けてペトロは22節から36節までにおいて、こういう聖霊注ぎが実現するための大きな二つの前提、一つが主イエスが復活されているということ、もう一つが主イエスは神の右に上げられておられるということ、この二つ論証する。先ず、22節から24節において、何よりも、復活された「ナザレの人イエス」についての根本的な宣教、主イエスについて教会がいつも最小限宣べ伝えなくてはならないメッセージが語られる。そして、その後、25節から詩編を用いての解説が行われる。

今日は、この「ナザレの人イエス」についての基本的なメッセージ、これを学ぶことにする。

22節.

「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりで。」

「イスラエルの人たち」と呼びかけている。ペトロが話し始めた最初の14節では、「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち」というふうに直接目の前にいる聴衆を相手取ったのだが、22節では、エルサレムに住んでいるかどこに住んでいるかを問わない、とにかく神の民「イスラエルの人たち」全体に対するキリスト教の最初の語りかけという形になっている。

「ナザレの人イエス」と呼ぶ呼び方は、ルカの第一巻である福音書では、悪霊が叫ぶ時(4:34)と、あともう一回エリコの近くで群衆が盲人に向かって「ナザレの人イエスのお通りだ」と言ったところで用いられていただけ(18:37)である。

「ナザレ」と言う地名は旧約聖書には出て来ない、まったく無名の村であったので、「ナザレの人イエス」と語り出す話しというのは、当時は非常に異例な、大変珍しい呼び名であったらと思われる(ヨハネ1:46「するとナタナエルが、『ナザレから何か良いものが出るだろうか』と言ったので、フィリポは、『来て、見なさい』と言った。」)

「証明なさいました」と訳されている言葉 (ἀποδείκνυμι、アポダイクヌミ) は、新約聖書に4回しか使われない言葉で、この先の25章7節では「立証する」と、またテサロニケの信徒への手紙二2章4節では、「宣言する」と訳されている。「立証する」とか「宣言する」というふうに、非常に重々しく訳しているように、「ナザレの人イエス」というのは、神から証明され任命された特別の人間であると、こういうことをまず言い切る。

では何に任命されたか。ここでは“何に”というのとは別に指定されていない。それを新共同訳は、「神から遣わされた方であることを」と補っている（この言葉は原文にはない）。

【NKJV】 "Men of Israel, hear these words: Jesus of Nazareth, a Man attested by God to you by miracles, wonders, and signs which God did through Him in your midst, as you yourselves also know

イエスが「神から証明された人である」ということは、神が「イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって」証明されている、という。それで「あなたがた自身が既に知っているとおります」。これらの奇跡、不思議な業、しるしを、ペトロは、「神が、イエスを通して」なされたことだと主張している。このように、「ナザレの人イエス」という人物はイスラエル人の中で隠れもない、いや、皆がよく「知っている」、神から「証明」された人物であった、という。

23 節.

「このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまいました。」

原文では「イエス」という固有名詞はない。「引き渡されたこの方」となっている。

【NKJV】 "Him being delivered by the determined purpose and foreknowledge of God

「引き渡されたこの人」という「引き渡される」と言う言葉 (ἐκδοτος、エクドトス) は、新約聖書にここにしか出て来ない形容詞で、もともとの動詞は「貸す、渡す」という意味。

神から引き渡されたのは、「お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで」と断っている。「あらかじめご存じのうえで」と訳されている言葉は (πρόγνωσις、プログノシス) は、「予知」という言葉で、これは「お定めになった計画」つまり聖定というのと同じ内容 (ペトロの手紙一1章2節参照)。

このことは、一つには、主イエスが裏切られて殺されることになっても、神様の側の番狂わせで何か困ったことが起こったということではないということ。

もう一つは、積極的に、主イエスの死にはそれなりの深い意義がある、神様の側にはそれなりの目的がおありなのだ、ということの意味している。その主イエスの死の持っている意義については、ここでペトロは深追いしようとはしない。ただ、ルカは第一巻の福音書の最後の晩餐の記事で、主イエスはどういう意味で死なれるのか、血を流されるのかと言うことは、もう既に明らかに記していた (22:19-20)。

19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」20 食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」

神様の側でのそうした深い意義つけに対して、「あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。」

ここで「律法を知らない者たち」と訳されている言葉 (*ἀνομος*、アノモス) は、多くの場合には「不法の者、罪人」と訳される場合が多い。しかし、ここでは、異邦人のこと。主イエスを十字架刑に処刑したローマの総督や兵卒は、「律法を持たない」異邦人であるために、神様のかねてからの預言とか神様の御心とかお定めなどは考慮に入れなくて処刑をしてしまったのである。

神様の側の聖定と、人間が行う行動の罪深さとが、鮮明に対照されている。神様の「お定めになった計画」と「あらかじめ立てられた計画」によって「引き渡された」方を、「あなたがた」人間は、「律法を知らない」異邦人によって「十字架につけて殺してしまった」という。そして、このところでペトロが強調したい点は、その人間側の罪深さである。

24 節.

「しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。」

【NKJV】 "whom God raised up, having loosed the pains of death, because it was not possible that He should be held by it.

ここでも「このイエスを」という固有名詞はない。関係代名詞をもって 23 節で語られた「この人を」「神は復活させられ」たのだと続いている。結局、22 節から語り出されているペトロの説教は、「イスラエルの人たち、これらの言葉を聞いてください。ナザレの人イエスを」、「引き渡されたこの方を」、そして「この方を神は」、というふうにどんだんたたみかけて、「復活させられたのです」というところまで一気に聴衆を引っ張って行く、そういう話の仕方である。

死の「苦しみ」と訳している言葉 (*ὄδιν*、オディン) は、「産みの苦しみ、陣痛」という意味の言葉である。「苦しみから解放して」と訳しているのは、原文では「陣痛を

解放する」、つまり「終わらせる」という意味。狭い意味の「陣痛」と言う言葉を、広い意味での「苦痛、苦しみ」というのに広げて、それから「解放する」という言葉を、「解く、終わらせる」というような意味で使って、「神は死の苦しみを終わらせて、復活させた」、こう言っている。

「死に支配されたままでおられるなどということとは」という文章は、「死の下に御主人面をされることができない」という言い回し。「ありえなかった」、つまり「できなかった」という。死の下に服して死に主人面をさせること、これは主イエスには、耐えることが「できない」ことだ、だから復活させられた、そういう論じ方である。

では、なぜ「できない」のかというと、主イエスは「神が証明された方」であるということが一つの理由となる。更に、今日の箇所にはないが、この先の3章14, 15節においてペトロがもう一度復活を語るとき、こう言っている。

「聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。」

ここに出てくる「命への導き手である方」、これがなぜ死の下に服することが「できない」という内容的な本当の理由であろう。イエスと言う方は実質的に「命の導き手」であられるから死に服していることは「できない」。

ここで「導き手」と訳されている言葉（ἀρχηγός、アルケーゴス）は、ただ「リーダー」とか「ガイドさん」というような軽い意味ではなくて、むしろ「源、創り出すもの、作者」という意味を持っている。「命のアルケーゴス、命の源泉」である。そういうお方だから「死の下に服しつづけることはできない」のである。

この「アルケーゴス」と言う言葉を使って、ヘブライ人への手紙12章1-2節では「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者（アルケーゴス）また完成者（トレイオーテース、τελειωτής）であるイエスを見つめながら」と言われているように、信仰を生み出すと共にそれを完成させる、初めと終わり、これを握っている方イエス、と言われている。同じく2章10節では「救いの創始者」（τὸν ἀρχηγὸν τῆς σωτηρίας、）とも言われている。